

【 復活讃詞 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
 恵 深 主 爾 高

くだり、みつかのほうむりをうけて、
 降 三 日 葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、
 我 等 苦 釋 給

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
 我 生 命 復 活 主 光

えいはなんぢにきす。
 榮 爾 歸

【 洗礼祭のアポリティキオン 第1調 】

こおえいはちちとこいとせいしんにきす、
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸

しゅよ、なんぢがイオルダンにせんをうくると時
 主 爾 洗 受 時

き、せいさんしゃのけいはいはあらわれた
 聖 三 者 敬 拜 顯

り、けだしちちのこえなんぢをしょうして
 蓋 父 聲 爾 證

しあいのことなづけ、せいしんもはとのかた
 至 愛 子 名 聖 神 鴿 形

ちにあらわれてことばのたしかなるをしめ
 顯 言 確 示

せり、あらわ れてせかいをてらし
 現 世界 照
 しハリスト オスカ みよ、こう え い は なんぢに き
 神 光 榮 爾 歸
 す。

【 洗礼祭のコンダキオン 第4調 】

いまもいつ も よよ に、アミン。
 今 何時 世 世
 しゅよ、なんぢはこんにちせかいにあらわ あ
 主 爾 今日 世界 現
 れ、なんぢのひかりはわれらにしるされた
 爾 光 我 等 印
 り、われらなんぢをうけみとめてうと お
 我 等 爾 承 認 歌
 おう。ちかづきがたきひかりよ、なんぢき
 近 難 光 爾 来
 たりなんぢあらわれたま えり。
 爾 現 給

司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしょう} 聖者の中に息い、^{せいさん こえ もつ かしょう} セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} ヘルヴィムより讚榮せられ、^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} 悉くの天軍より伏拝せられ、^{ばんぶつ む ゆう} 萬物を無より有と
^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、^{ばんぶつ む ゆう} 爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねがもの ちえ めいご あた つみ おこなもの す そのすくい ため つうかい} 願う者に智慧と明悟とを與え、^{ばんぶつ む ゆう} 罪を行う者を棄てずして、^{ばんぶつ む ゆう} 其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ と き おい なんぢ せい} を立て、^{ばんぶつ む ゆう} 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、^{ばんぶつ む ゆう} 此の時に於ても、^{ばんぶつ む ゆう} 爾が聖な

さいだん こうえい まえ た なんぢ どうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を

もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる

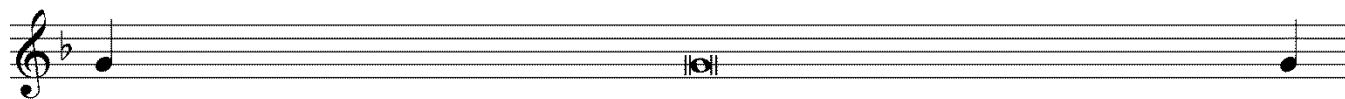
しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】



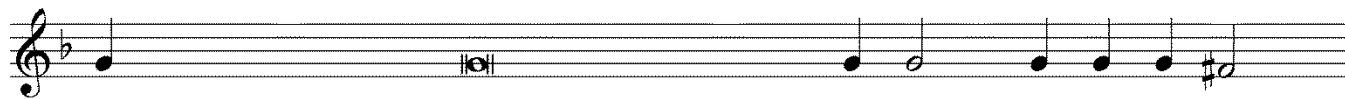
せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖神 聖勇毅 聖



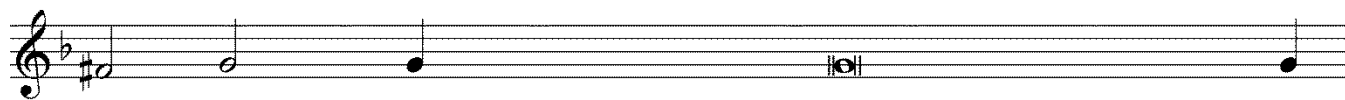
じょうせいのものよ、われらをあわれめ
常生者 我等 憐



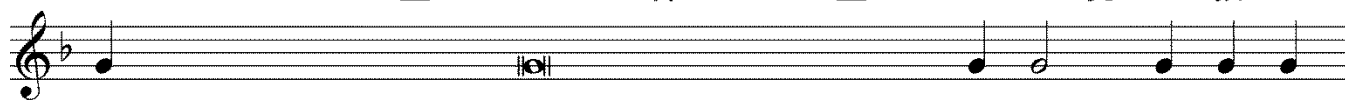
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖神 聖勇毅 聖



なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
常生者 我等 憐



めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖神 聖勇毅



せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖常生者 我等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世
 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 殺 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 提綱 (プロキメン) 洗礼祭後の主日 第1調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、

しゅ よ 、 わ れ ら なんぢを た の む が ご と く 、
 主 我 等 爾 頼 如

な んちの あわれ みをわれらにた れたま
爾 憐 我 等 垂 給
え。

誦經) ^{ぎじん}義人よ、^{しゅ}主の^{ため}爲に^{よろこ}喜べ、^{さんえい}讚榮するは^{ぎしや}義者に^{かな}適う、

しゅ よ 、 われらなんちをたのむがごとく、
主 我 等 爾 頼 如
な んちの あわれ みをわれらにた れたま
爾 憐 我 等 垂 給
え。

誦經) ^{しゅ}主よ、^{われらなんち}我等^{たの}爾を^{ごと}頼むが如く、

な んちの あわれ みをわれらにた れたま
爾 憐 我 等 垂 給
え。

【 使徒經 (アポストロス) 224 半端 エフェス書 4 章 7 節～13 節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒パヴェルが^{じん たつ}エフェス人に^{しょ よみ}達する書の讀、

司祭) ^{つつし}謹みて^き聴くべし、

誦經) ^{けいてい}兄弟よ、^{われらかくじん}我等各人に^{おんちよう}恩寵の^{あた}與えられしは、^{たまもの りよう}ハリストスの賜の量に^{したが}循うなり。故

に^い云えるあり、^{たか}高きに^{のぼ}登り、^{とりこ}擲者を^{とりこ}擲にし、^{ひとびと}人人に^{たまもの}賜を^{あた}與えたりと。夫れ^{そのぼ}登れりとは、

^{かれ}彼が^ま先づ^ち地の^{もつともした}最下なる^{ところ}處に^{くだ}降りしを^{しめ}示すに^{あら}非ずや。降りし^{くだ}者は、^{もの}彼即^{かれすなわちしよてん}諸天の

^{うえ}上に^{のぼ}登りし者なり、^{もの}此れ^こ萬有を^{ばんゆう}充たさん^み爲なり。彼が^{ため}與えし者には、^{かれ}使徒あり、^{あた}預言者

あり、^{ふくいんしゃ}福音者あり、^{ぼくしおよ}牧師及び^{きょうし}教師あり、^{せいと}聖徒を^{ぜんび}全備せしめ、^{つとめ}服役の事を行^{こと}い、^{おこな}ハリス
 トスの^{たい}體を^た建てて、^{われらみなしん}我等皆^{かみ}信と^こ神の子を^し識る^{ちしき}知識との^{いつ}一なるに、^{せいぜん}成全の^{ひと}人と^な爲るに、ハ
 リストスの^{まつた}全^{せいちよう}き成^{りよう}長^{いた}の^{およ}量^{およ}に至るに^{およ}迫る。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりに、恵みが与えられている。そこで、こう言われている、「彼は高いところに上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた」。さて「上った」と言う以上、また地下の低い底にも降りてこられたわけではないか。降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上にも上られたかたなのである。そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。

司祭) ^{なんぢ}爾に^{へいあん}平安、

誦經) ^{なんぢ}爾の^{しん}神にも、ア^{リル}イ^ヤ、

【 アリルイヤ 洗礼祭後の主日 第5調 】

司祭) ^{えいち}睿智、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ}主よ、^{われなが}我永^{なんぢ}く爾の^{じれん}慈憐を^{うた}歌い、^わ我が^{くち}口を^{もつ}以て^{よよ}世世に^{なんぢ}爾の^{しんじつ}眞實を^{つた}傳えん、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{けだしわれい}蓋我^{じれん}言^{なが}う、^た慈憐は^{なんぢ}永^{なんぢ}く^{しんじつ}建て^{てん}られたり、^{かた}爾は^{なんぢ}爾の^{しんじつ}眞實を^{てん}天に^{かた}固めたり、



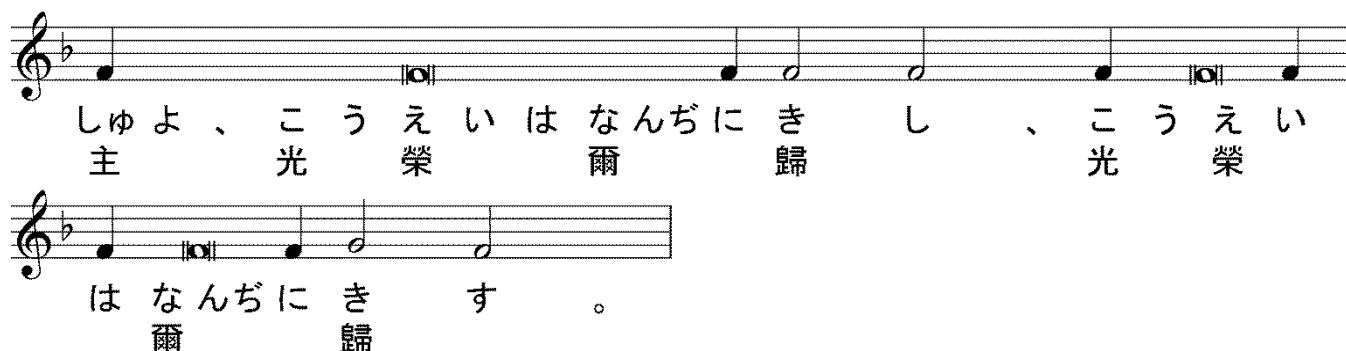
司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅざい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん}人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念
^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ}の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を
^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ}畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ 所
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ}を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん}爾は我が 靈と體との光照なり、我等 爾と 爾の無原の父と至聖至善にし
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ}て生命を施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書8端 4章12~17節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん}睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ}マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き}謹みて聴くべし、

司祭) ^{か とき とら き さ はな}彼の時イイススはイオアンが囚われたりと聞きて、ガリレヤに去れり、ナザレトを離れて、

^{およ さかい うち かいひん きた ここ お よげん}ザヴロン及びネファリムの 境の内なる海濱のカペルナウムに來りて、此に居りたり、預言
^{しゃ もつ い かな いた いわ ち ち かいひん}者イサイヤを以て言われしことに應うを致す、曰く、ザヴロンの地、ネファリムの地、海濱

^{みち}の路にイオルダンの^{そと}外に在る^あ異邦の^{いほう}ガリラヤ、^{くらやみ}幽暗に坐する^ざ民は^{たみ}大なる^{おおい}光を見、^{ひかり}死の地
^{およ}及び^{かげ}陰に坐する^ざ者に^{もの}光は^{ひかり}輝^{かがや}けりと。^{これ}是より^{はじ}イエス始めて^{おしえ}教を^の宣べて^い曰えり、^{かいかい}悔改せ
^{けだしてんごく}よ、蓋^{ちかつ}天國は^{ちかつ}邇^{ちかつ}づけり。

(比較用 口語訳) イエスはヨハネが捕えられたと聞いて、ガリラヤへ退かれた。そしてナザレを去り、ゼブルンとナフタリとの地方にある海への町カペナウムに行き住まわれた。これは預言者イザヤによって言われた言が、成就するためである。「ゼブルンの地、ナフタリの地、海に沿う地方、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤ、暗黒の中に住んでいる民は大なる光を見、死の地、死の陰に住んでいる人々に、光がのぼった」。この時からイエスは教を宣べはじめて言われた、「悔い改めよ、天国は近づいた」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ